第一次国共合作期におけるコミンテルン軍事顧問の役割 (II)
—А.И. Черепанов: Записки Военного Советника в Китае—を中心として

滝　本　可　紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the First Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (II)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

At the second Comintern congress in 1920 Lenin's "theses on the national and colonial question" argued that Communist party in Asia could make temporary agreements and even alliances with bourgeois nationalist movement in a united front. The Soviet government pursued a dual approach to China. Sun Wen gradually developed a working alliance with the Comintern. In 1923, Яков Герман, Павел Смолецев, Николай Терешатов, Владимир Поляк, Александр Черепанов were selected as military advisers for the government of Canton by Анатолий Ильчи Геккер, the military attache to the Soviet embassy in China. He came back to seek for personnels suitable for military advisers in China. They left Moscow for Pekin. There, they studied Chinese and Chinese culture. After that the author went to Canton by way of Shanghai.

コミンテルン第二回大会の民族・植民地問題に関するテーゼに基づき，ソ連は国家としては当時の北京政府と，コミンテルンとしては南方の孫文の政権と接触していた。今まで軍閥の力を利用することによって革命を成就し得ると錯覚していた孫文も，度重なる裏切りにより，今や自己の力による革命の道をたどり始めた。その一つは国民党の改組であり，もう一つは党の軍隊の創設であった。このために孫文の要請もあって，政治顧問と軍事顧問がコミンテルンから送り込まれた。1928年，士官学校のかつての校長であり，現在，在中ソ連大使館付武官となっている Анатолий Ильич Геккер が士官学校に姿を見せ，軍事顧問としてふさわしい人物を5人選んだ。それは Яков Герман, Павел Смоленцев, Николай Терешатов, Владимир Поляк, Александр Черепанов であった。

当時，革命直後であり，特に国内戦や外国の干渉が激しかったため，多数の亡命ロシア人が中国に流入していた。直前まで互いに戦った人々と，再び長春や上海で出会っている。筆者達は北京で中国の事情やエチケットを学んでいる。しばらく北京に滞在した後，1928年の終りに，Бородин は Герман と Поляк と共に広州へ出発し，一カ月遅れて1924年1月のはじめに筆者は広州へ出かけている。筆者は当手記でその間の事情，また当時の広東省及びその周辺の詳細な軍事情勢を紹介している。以下，彼の手記の全訳を記す。

昭和56年9月18日受理

第　一　部

広東にて
革命の発端
はるかなる国へ

1923年の春は私にとって特に張り詰めた時期であった。私は参謀本部士官学校（現在のフルンゼ名称士官学校）の基礎コース終了を間近かにひかえ，同時にこの士官学校の東方学部，上級コースに入る準備をしていた。

極めて困難な戦いの中で，自分達の社会主義の祖国を守った労働者，農民には教育に対する抑え難い渇望があった。下層階級出身の私の同志達の多くは二つの大学で学んでいた。例えば陸軍士官学校の基礎コースと農業大

学というように。士官学校の他に医科大学を修了した者さえあった。この素晴しい風潮は私の心をもとらえた。私は基礎コースと同時に士官学校東方学部で学んでいた。

一体，何故，東方学部が私の関心を引いたか。少年の頃からすでに，極東での嵐のような事件が何物にも増して私の想像力をかきたてていたのである。最初は1900年の中国人民の蜂起（義和団）であり，次が日露戦争であった。今でも覚えているが，当時，私はこれらの事件を描いた挿絵を探し出し，興味深くそれをながめたものだった。かなりの年月を経た後，私は極東の活躍中の人々と関係を持つようになった。内戦当時のいくつかの戦線で，中国の同志と共に戦ったことがあった。かくて私の中国に対する関心が新たな力を持って甦ってきた。

1918年の3月か4月，私が Гатчина で第二赤衛連隊を指揮していた時，一人の若い中国人が私達の所へやって来て，自分を志願兵に採用して欲しいと頼んだ。その後，さらに数人の中国人を連れて来た。そこで私達は彼等をも編入した。この後，中国人が何十人の数で私達の所へやって来た。この事を私は師団長に報告した。彼の命令によって中国人の中隊が編成され，ある施設の警備が任された。

私が1918年の終りから1919年の初めにかけて，その先任参謀を務めた旅団にも中国人志願兵の部隊があった。バルト海沿岸地域をドイツの侵略者や白衛軍から解放するために戦った時，私達は悲しみも喜びも彼等と分かち合った。

中国語を学びたいという希望が私に湧いてきた。東方学部に入った時には，自分が将来，外交関係の仕事に身を捧げることになろうとは予想もしなかった。私の想像力もそこまでは及ばなかった。青年時代にそうである様に，ただ極東で働きたいと思ったにすぎなかった。

第3学年生の軍務の配属に関する委員会は私に東方学部を断念して師団を指揮するように，何度も勧めた。特に私の同意を得ようとしたのは当委員会のメンバーで，私の友人，かつての同僚，大学の同級生である Николай Иванович Жабин であった。《軍は指揮官を必要としている》と，彼は言った。Жабин はやがて，彼自身が中国の国民革命軍の軍事顧問を選抜しなければならなくなろうとは想像していなかった。

私達は卒業試験と卒業論文審査の準備をしていた。大使館付き武官 Анатолий Ильич Геккер（当士官学校の以前の校長）が中国からモスクワへ帰って来たことを，学生達はどういうわけか知るようになった。彼は中国で仕事をする者を学生の中から選ばねばならないということであった。しばらくして，ある時，士官学校の校長秘書が私に言った。《Анатолий Ильич のところへ立寄ってもらいたいと，校長が言っています。》私には《Анаттолий Васильвич》と聞えた。私は彼の講義を受けるのが好きだった。そこで驚いて尋ねた。《同志 Луначарский ですか。》

—違います。Геккер Анатолий Ильич です。—と，秘書が説明し，さらにつけ加えた。—彼は委員室で先程からあなたをお待ちです。—

何故，私が以前の校長に必要とされるのか，私にはどうしてもその理由が思い当たらなかった。私達は軍服姿の Геккер を見なれていた。今回は平服姿であったので，最初，私は彼だとわからなかった。平服だったので，彼は私が心にいだいていた《古典的な》外交官の姿をそなえていた。Анатолий Ильич は親しみ深く挨拶し，坐るように手で示した。彼は注意深く私を見ながら，通常の調査用の質問をした。社会的出身，最近の職務，旧軍隊の階級，赤軍に入隊した時期，内戦での参加，党籍。

私は答えた。

—農民出身，旧軍隊で二等大尉の階級で，中隊長を務めました。1918年初頭，戦線で赤軍に参加し，1918年2月18日，ドイツの進撃の最初の日から内戦に参加し，1920年秋，ポーランドの戦いでそれを終えました。戦線で1年半，連隊を指揮し，旅団の先任参謀で1年以上旅団を指揮しました。党員候補です。

—あなたは戦時編成の将校出身ですか。

—そうです。

—私はあなたより少し年長で，平時編成の将校出身で旧軍隊の中佐で軍務を終えました。

それから同席している士官学校コミッサール Муклевич の方を見て Геккер は何か同志 Черешанов に質問がありますかと，尋ねた。

—ありません—と，Муклевич が答えた。—私は1918年の秋から同志 Черешанов を知っています。Псков への進撃準備の時，彼は師団の先任参謀でした。士官学校でも充分訓練を積んだ有能な指揮官であることを示しました。すでにあなたに述べました様に，私は党員候補，同志 Черешанов に賛成します。

翌朝10時に Анатолий Ильич を訪ねるようにと言った後，私を部屋から出してくれた。翌日の午前中，ホテルの Геккер の部屋に私の同期生：Яков Герман, Павел Смоленцев，他に士官学校をすでに卒業し，さらに東方学

部で勉強を続けている Николай Терешатов と Владимир Поляк が集まった。

Геккер は Я. К. Берзин と《見合い》させるために，私達を労農赤軍司令部へ連れて行った。一彼とは内戦時代にたまたま会ったことがあった。そしてここに，私の運命は決った。孫文がソビエト政府に政治及び軍事顧問団を派遣してくれるように願い出たことを知り，私達5人全員がはるかなる国へ義勇兵として行くことに同意した。

この偉大な中国の革命家に私達が援助を与えるという考え—これは言うまでもなくレーニンの考えであった。まさにレーニンこそが孫文に着目し，彼の活動の意義を評価していたことを思い出そう。ヨーロッパの文明世界は1911年，辛亥革命の年に孫文のことを知った。しかし，それまでは中国の自由のために戦っている戦士達の指導者の名前は西欧の新聞にほとんど現われたことはなかった。一方，レーニンはすでに論文を発表し，その中でロシア社会民主労働党，ロシアのプロレタリアート，世界の全ての誠実な第2インターの参加者に孫文の活動の成り行きを是非とも注意深く見守り，それが持つ意義に注意を向ける様に勧めていた。これは次のような時代の中で発表された意見である。即ち，Столыпин 及びその一党が党を地下活動に追いやり，多くのすぐれたボリシェヴィキの指導者が亡命を余儀なくされた時代であった。レーニンは事実，ロシア社会主義革命と中国の革命的民主主義とを将来同盟させようという思想を描いていた。かくて我が国にプロレタリアの権力が打ち立てられた時，この思想は実現されるようになった。

この同盟を組織的に具体化する指導に当たっていたソビエトの同志達はレーニンの指示に基いて行動していた。私の念頭にあるのは Г. В. Чичерин, Л. М. Карахан, А. А. Иоффе, М. М. Бородин 等である。孫文の方もこの時代に，中国の解放に対してロシア革命が持つ意義を徐々に理解し始めていた。この過程を分析している文献は非常に数多くあるが，第一に挙げたいのは，ソ連アカデミー準会員，С. Л. Тихвинский の諸論文である。私が強調したいのは次のことである。孫文が自分の方から我が国の経験を求めてきたことは2つの偉大な人民の友情と相互援助が深い自然的なつながりと，極めて強い必然性に基いているという誰の目にも明らかな歴史的証拠の一つである。

歴史的諸事件の客観的進行が全て，この同盟の成立を避け得ないものにしていた。それ故，党及び政府が私達に委ねた任務は全く異例なものであったが，それにも拘らず中国に派遣される顧問団の最初の5人に選ばれた赤軍の若い指揮官である私達にとっては自然なものに思われた。

現実は，これより2年前にやっと干渉者や白衛軍との流血の戦いが終ったにすぎなかったのである。国内は傷，飢餓，寒さから決して立ち直ってはいなかったが，私達には自分の生命をも顧みず，中国革命の諸問題に役立つために数千キロも離れた私達の全く知らない異国の広州（広東）へ困難を乗り越えて到着する義務があった。私達は皆，自分でもそうすべきだと考えており，この点について一瞬も疑問をいだかなかった。レーニンの思想，ソビエト権力を求める闘争で見られた諸国民の相互の友情を示す実例は私達を確信ある国際主義者に創りあげていた。

私達は孫文の名前やその働きについては以前から知っていた。その当時，ただソ連の世論及び刊行物だけが中国の解放闘争を注意深く見守っていた。その闘争が始まった時から，党は我が国の新聞雑誌にそれに対する各地の国際的な反響を掲載していた。そして事実は常にこの政策の賢明さを証明したのであった。

それ故，私達は少しも動揺しなかった。

—旅に出よう！

モスクワの Воздвиженка 通り（現在のカリーニン通り）で私達軍服姿の5人は百貨店に立寄った。既製服売場に上って，売場の前でためらいがちに立止った。

私達の中で最年長者で，背が高く，がっしりした，陽気で丸顔の Николай Терешатов はそこにある服をちらっと見て言った。

—これは問題だ。自分がこんな厄介な上着を着る羽目になるとは思ってもみなかった。どんな風に服を選んだらいいのかわからない。Саша（筆者のこと），手伝ってくれるだろう。—彼は私に助けを求めた。

—コンサルタントが居た。私と Николай は背広だけでなくジャケットさえも作ったことがなかった。Яша (Яков) に助けてもらおう。彼は軍務に就く前事務員だった。きっとこの不可解な服を着ていたはずだ。—

—長い間ではないが着たよ。—と，背の高い痩せた，きちんと髪を梳かしたエストニア人の Герман が答えた。

彼はあたかも天井に助言でも書かれているかのように，上を見つめ少し間をおいて言った。

—先ず決めなければならないのは色だ。

—勿論，グレーさ。外国では誰もグレーを着ている。—入念に髪をなで付けて禿を隠している Володя Поляк

が自信たっぷりに Яша の言葉を遮った。

しばらく迷った後，Николай，Яша と私はもみ枝模様のグレーの同じ背広を買い，Володя は小さな格子模様のグレーの背広を買ったが，Павел Смоленцев は私達の《グレー》の惚れ込みには負けず，ダークブルーの背広を手に入れた。その晩レストランで会うこと，その時には平服を着て来ることを約束してから私達は思い思いに別れた。

私と Яша は寮へ行って着換えを始めた。

一次に，ネクタイを結ばなければならない。一と，Яша が言った。

どんな風にネクタイを結ぶか，どうしてもそのイメージが浮かばなかったし，またその知識もなかった。私の様子はまるで老眼の人が眼鏡なしで針に糸を通すのに似ていた。とうとう Яша は私に講釈するのに飽きて，自分でネクタイを結んでくれた。私がこの複雑な芸術をマスターするまでの2週間，辛抱強く教えてくれた。

私達は少年の様に新しい服装を自慢したくなった。Тверская（現在のゴーリキー通り）へくり出してみて当惑した。私達は新しい上等の服に着換えるまで，ソビエト国民が世界戦争，外国の干渉，内戦に耐えてきて，ひどい服装をしていたことにどういうわけか注意を払っていなかった。そしてそこに，同じソビエトの人間である私達がハイカラなロンドン子のように，洒落た服を着て突然現われた。きまり悪くなり，できるだけ急いで寮に帰ろうとした。

一週間後に私達は東バイカル地方に着いた。

一間もなく国境を越えるよ。一と，私達と一緒にやって来た Анатолий Ильич Геккер が教えてくれた。

私達は窓から目を離さなかったが，その単調な土地に国境を示すものは何もなかった。列車は知らぬ間に満州里駅に近づいていた。私達の車輛をすぐに中国兵が取り囲んだ。彼等は好奇心をいだいて私達を見つめていた。そこで初めて私達は生家のドアーが私達の背後でバタンと閉じられるのを感じた。

長春で乗り換える予定になっていた。Геккер は街には行かない様に決めた。

一駅で時間まで待った方がよい。あまり人目を引かない様に，一と，彼は言った。

しかし，結果は逆になってしまった。そこでは白系ロシア人の間に私達の到着の噂が急速に広まった。そして間もなくあまり大きくない駅が彼等でいっぱいになった。警察はどこかへ消えてしまった。恐らく警察自身の手先が事件を挑発するために私達の到着を《ささやき》さえしただろうと充分考えられた。私達は緊張はしたが，恐れることなくこれらの人達の顔を見つめていた。内戦が終ったのはそれ程前のことではなく，私達は以前と同様に白衛軍の脱落者に対して激しい嫌悪を感じた。

亡命者達は3～4人ずつ，次々と側を通り過ぎて行った。彼等は私達を吟味するようにとげとげしく見ていたが，それはまるで何か珍しいものに出会ったかの様であった。婦人達は渋面をしていた。だが叫び声も起こらず，脅迫を顕に表わすこともなかった。それから酔っぱらったこの地方の白衛軍の新聞記者が現われた。彼は風采の上がらぬ，髪をぼさぼさにした男であった。身をかがめて私達の所へそっと近づき，まるで有り得べき一撃から身を守るかの様に手を挙げ，ヒステリックに叫んだ。

—ボリシェヴィキ！

そしてすぐさまあわてて，群集の中に身を隠した。

列車が入って来ると警官が現われた。緊迫した情況は和らいだ。しかし，この出会いはこのままではすまなかった。私達は一層警戒するようになった。

列車の中では，私は運がついていなかった。皆は隣り合って席をとったが，私はある恰幅のいい身なりのよい男と並んで席をとる羽目になった。

Николай Терешатов はすぐに私の隣に坐っている人の《予測》をした。—白衛軍が同乗させた手先だ。様子からすると，彼は以前大佐だったと思われる。注意して見ると右手の指が片輪になっている。間違いなく手榴弾の雷管の暴発の所為だ。Саша，君は運が悪い。前門の虎，後門の狼というところだね。恐らく今度は夜中に絞め殺されるかもしれない。ひどいことになった。だが，Яша が隣にいる。だから見張ってやる。何か事が起こったら叫ぶかノックしろ。私達がすぐに助けに行く。

私は寝台の上段に横になり，気づかれない様にちらちら《大佐》の方を見た。彼はドアに鎖をかけ，横になった。明かりは消さなかった。恐らく彼もまたボリシェヴィクと同じコンパートメントに居合わせて，途惑っていたのであろう。だが，その時は私にはそうは思えなかった。彼は私が寝入るのをじっと待っている，と思った。《そんなことはないよ一，起こりはしない。眠り込みさえしなければいいんだ。攻撃してきたって決して負けはしない》。私は心に決めてポケットにある連発拳銃の銃把に触っていた。そして間もなく睡んでしまった。激しいノックの音で目が覚めた。誰かがドアの中に押し入ろうとしていた。《襲撃だ》と私は判断し，震える手で今にも鎖をはずそうとしている《大佐》に叫んだ。《鎖をは

ずすな》

相変わらずドアの中に押し入ろうとしていた。

—そこに居るのは誰ですか。何の用ですか。—と，《大佐》は哀願するように尋ねた。

—開けろ— Николай の声が聞こえた。

ドアが開くと，Николай と Яша がとび込んで来たが私達二人の間につかみ合いが起こっていないのを見て当惑し，立止った。

—あなた達の所で何が起こったのですか。—と，Николай が尋ねた。

—別に変わったことはありませんよ。—と，私は答えた。

—何でもないって。で誰が呻いていたのですか。

—知りません。私は眠っていて何も聞こえませんでした。

—恐らく私が呻いたのでしょう。—と，恥ずかしそうに《大佐》が言った。—これは時々私に起こるのです。特に仰向けになって寝込む時には。その上，別れの夜，私と友達は腹いっぱい夕食をとりました。お騒がせしたことをどうぞお許し下さい。

《空騒ぎ》が生じた。結局，私の同室者は，翌日に分ったのだが，大佐ではなく，そればかりか軍人でさえなく露亜銀行（Русско-азиатский банк）天津支店の銀行員であった。

北京への長途の旅はその後，何も変わったことなく終った。

北京にて

1923年6月21日，私達は北京に到着した。駅前広場に出ると，クラクションを鳴らし続けている自動車，四輪箱馬車，二輪の車，人力車，苦力，種々雑多な通行人の群の動きで，目がちらちらした。騒音は耳を聾するばかりであった。乗りませんか，という人力車夫の叫び声や，通行人に向かって注意する御者の叫び声。あらゆる商品の売り手達がそれぞれの流儀で呼びかけていた。我が国の夜警に見られるような拍子木を叩いている者もあれば，オーケストラで使うような鉄のトライアングルを鳴らしている者もあり，また銅製の角笛のようなものを力いっぱい吹いている者もあり，また昔，我が国にあった様に，買い手を色々な叫び声でしつこく呼び込んでいる者もあった。全てこれらの音が一つになり，何か他に比べようのない耳ざわりな音を作り出していた。

この大きな人間の蟻塚で身支度をする時間もないうちに全く突然に，群集の喧騒を圧して古いロシア国歌の荘重なメロディーが鳴り始めた。広場の私達の近い所で，ブラスバンドが演奏しながら行進していた。その後に2列になった馬の引く天蓋つきの奇妙な馬車がゆっくり進んでいた。私達は迎えに来ていた使節団員にどうしたのかと尋ねた。これは金持の中国人の遺体が入っている棺が祖先の墓地へ送られているのだとわかった。

—それなのに何故，ロシア国歌が。

—ロシア国歌だって。いやあ，とても単純なことですよ。きっと中国人の指揮者がブラスバンドの演奏に葬送行進曲を選んでくれるよう誰か白系ロシア人出身の音楽家に依頼したら，その男は迷わず古いロシア国歌を売りつけたのでしょう。

大使館員の中に，中国語の教授 Алексей Иванович Иванов が居た。私達の多くは私をも含めて，モスクワで彼に教わった。

党及び政府はソビエト使節団の上層部に，実務上の事柄に関しても，また純粋に外交上の議定書作成の面倒な事柄に関しても十分に要請に応じられる知識人を起用した。それは特命全権大使 Л.М. Карахан，第一参事官 Давтьян 等であった。しかし，私達も含めて多くの大使館員はまだ，エチケットの諸規則をマスターする必要があった。

大部分の新進の《赤い外交官》，—当時そう呼ばれていたのだが—は何らかの政治的方策を実施する場合に，ほとんど準備なしに聴衆の前で演説することができた。一時間かそれ以上，彼らは論理的にかつ生き生きと，前もって用意した原稿なしで話をし，説得した。だが，食事やその他の行儀作法，品の良さを感じさせる心得などに関するあらゆることで，私達は始めのうち色々な失敗をした。勿論，私達に対して，例えば А.И. Иванов 教授のような一種の大使館付《新兵教育係下士》が訓示や配慮を与えてくれたのであるが。

私達の最初のかなり滑けいな《社交界へのデビュー》について語ろう。それは大したことではないが，私達が未知の情況を自分の物にしようとする際に先ず生ずる《苦悩》の一つの実例になり得る。

8月の終りに А.И. Геккер は私達を呼び出し，9月1日，ホテル《ワーコンリー》で音楽とダンスパーティー付きのディナーの冬のシーズンが開幕すると話した。

—いよいよ諸君が外国の社会に慣れる時が来た。—と，—彼は言った。—《社交界への出入》は Герман 君と Черешанов 君とから始めよう。その後で残りの同志に参加してもらおう—。夕方近く，私がタキシードを着て Яша の部屋へ立寄ってみると，彼は鏡の前に立って

いた。Яша は私の黒い蝶ネクタイをちらっと見て顔をしかめて言った。

—Сама, 君はもうそろそろ知ってもいい時ではないか。タキシードには黒ではなくて白い蝶ネクタイを結ばなければならないのだよ。

私は家へ戻って急いでネクタイを取り換え，2人は出かけた。当地に長く駐在している人達が重みをつけるために婦人同伴で行くことを私達に勧めた。そこで私達はП.И.Смолещев の妻を《借用》した。

中国人のボーイは私達がソビエトの市民であることをすぐに見てとった。彼は私達を最上のテーブルに案内した。ここからはどこもよく見渡せた。

ホールに居る外人の中には，人目を引こうとする男性が数多く居た。女性は顔に紅をさし，白粉を濃く塗ってひどく野卑に見えた。私達は一緒に行った婦人を誇りをもってながめた。私達には彼女があひるの群の中の白鳥に見えた。

ジャズが演奏された。ダンスのためのフロアーはぎっしりいっぱいだった。私達は食事が終ってもダンスをする気になれなかった。勿論，私達は流行の西欧のダンスを知ってもいなかった。私達の最初の《社交界への出入》は首尾よく終った。しかし，後でわかったのだが，友人達はとても心配していた。私達をレストランまで送ってから，そのまま映画館へ行った。困ったことには，映画の中でタキシードに白ではなく黒いネクタイを結ぶのを見た。

勿論，始めのうち私達が経験したあらゆる《苦悩》は今や，滑けいで，ナイーブなものに思われるようになった。事実，あらゆることが私達の予想したよりもはるかに簡単であることがわかった。私達自身も社交界の色々な慣習を急速にマスターした。

間もなく私達は適当な先生を見つけて，中国語と英語を一所懸命勉強し始めた。私達は中国人の生活を知るようになってきていたし，また使節団員の助けを借りて当時の中国の内外の状況を研究していた。

北京では，中国人の解放闘争の歴史がどうやらまた私達の目の前で始まった様だった。私達を憤慨させたのは大使館区域の制度であった。巨大な重い門のある石壁で取り囲まれているその地域へは中国人は入れなかった。

これは上海やその他の都市の共同租界と同様に《国家の中の国家》であった。租界では外国の軍隊が駐留し，外国の警察が活動していた。《開港場》の投錨地には外国の軍艦が停泊していた。

当時北京の中心からその町はずれに至る道をたどると，私達はあたかも何百年も歴史の深みへ入って行く様な気がした。ファッショナブルな自動車の流れが次第に多くの人力車，手押一輪車，荷車，らくだの隊商に置き換えられていった。町はずれでは現代風の邸宅も，電気の光があふれているホテルやレストランも見ることができなかった。そこには，中国人の家で，ランプの薄暗い照明があるだけの土壁の粗末な小屋がいっぱい建っていた。

北京で私達は中国人について新しい興味ある，また当時ソビエトの人々に全く知られていなかった多くの事を知る様になった。

当時，私達は若い，まだ極めて少数の中国共産党についてはほとんど知らなかった。それはマルクス主義者の別々のサークルを母体にして形成されつつあった。中国のコミュニストに関する私達の情報というと，1921月6の終りに上海で開かれた中国共産党第一回大会についての若干のデータだけであった。マルクス主義者，李大釗教授，《五・四運動》，北京大学の革命的学生のことなどが語られていた。

その頃，北京の政界は専らソビエトと中国の外交関係樹立の問題及び孫文を首班とする南中国の革命政府に関心を向けていた。

1923年2月1日，雲南，広西の連合軍は広州から軍閥，陳炯明の軍隊を追い出したその年，孫文は広州に戻り南中国政府の首班となり，活動のため私達軍事顧問を招いた。

我が国と北京政府との関係は極めて複雑なものであった。1919年7月，ソビエト政府はツアーロシアと中国との間に結ばれた全ての不平等条約を破棄し，中国と平等な外交関係を樹立する用意があることを声明した。

反動的な北京政府はソビエト政府の友好的な行為を無視してきた。しかし，広範な中国人民大衆はソビエトロシアが彼等の闘争を進んで支持する友であり，同盟者であることがやがてわかってきた。結局北京政府は1924年5月31日，ソビエト・中国間の協定に調印せざるを得なかった。

私達のグループはこの歴史的な幕の約1年前に中国に到着した。この国の状況を研究しても，どのような仕事が私達を待ち受けているのか，いくらかでも明確に想像することは相変わらずできなかった。

急に，9月のある日，私達は駐中初代ソ連全権大使Л.А.Карахан を出迎えに駅へ行った。そこには使節団員及びその妻達が到着していた。そこにはまた色々な中国の省庁，団体及び外国の代表部の多くの役職者が集ま

っていた。

容貌や服装の点で特に目立ったのは有名な冒険主義者，騎兵旗手 Савин であり，当時，彼はブルガリアの王位継承権を主張していた。大きな濃い頬ひげがあり，アレクサンドル III 世時代の，着古した肩章ぬきの軍人用のフロックコートを着ている様子は郡警察所長の悪い思い出に似かよっていた。後に Савин は Карахан に何度も次の様な事を要請して悩ませた。それは，ソ連へ出かけて自分にブルガリアの王位継承権があることを説明させて欲しいということであった。

Карахан が微笑しながら列車のデッキから姿を現わすや否や，オーケストラが《インターナショナル》を演奏し始めた。

環になって待っていた人々は到着した大使を囲んだ。間もなくして私達は Карахан に温く迎えられた。彼は私達がどんな風に勉強しているか，住み心地はどうか，と色々尋ね，さらに間もなくモスクワから一人の同志が到着すれば，私達の将来の仕事の内容がはっきりすることをほのめかした。彼はその名前は言わなかった。後でこれは Михаил Маркович Бородин のことだとわかった。

―当分の間は勉強を続けなさい。―と，Карахан は言った。

ついに中国に Бородин がやって来た。

最初に会った時，私達は好奇心をいだいて彼をよく観察した。背の高い，肩幅の広い人，広い額，知性のある目，大きな軍人風の口髭，ウェーブのある髪で頭の上部だけを平らに短かく切っていた。私達軍人に挨拶する前に彼はあたかも挙手の礼をするかのように，右のこめかみの方に手を動かした。Бородин は当時の文官の多くがやった様に軍人の真似をする傾向をもっていた。

私達の誰も Бородин とはこれまで会ったことがなかった。ここ中国で初めて私達は彼の興味ある経歴の中のいくつかの事実を知るようになった。

Бородин は 1884 年 7 月 9 日，昔の Витебск 県に生まれた。少年時代，ラトビアで過ごし，そこのロシア語学校で学び大学に入った。青年時代，革命運動に加わり，ラトビア社会民主党の宣伝部門で働らき，1903 年から，ロシア社会民主労働党員になった。1905 年，リガで革命運動に積極的に参加した。1 月から当地で，党内での偽名《Кирилл》でラトビアの社会民主党員の中で活動を始めた。

ロシア社会民主労働党（РСДРП）のリガ組織の代表として Бородин は Таммерфорс の党大会に出席し，大会の議長団の 3 人のメンバーの 1 人に選ばれた。彼はまた 1906 年，党のストックホルム統一大会に参加した。間もなく逮捕され，釈放後，英国，次にアメリカへ亡命した。アメリカでは最初ボストンに住んだ。1908 年，シカゴに移り，そこで移民者のために政治学校を組織し，非常に評判がよかった。同時に Бородин はアメリカ社会党員であり，《ロシアの政治犯を助ける会》の会計主任の仕事を果していた。

1918 年 7 月，Бородин はモスクワに帰った。短期間英国へ行き，1919 年，駐メキシコ，ロシアソビエト連邦社会主義共和国（РСФСР）の初代総領事に任命された。そして今度は孫文の招きに応じて中国にやって来たのであった。

Бородин はしばしば長時間，Карахан と用談することがあった。その年の終りに Герман と Поляк はすぐに Бородин と共に上海経由で広州へ出立し，一カ月後に彼等を追って，Николай Терешатов と私が行く様にということだった。Смоленцев は北京に残ることになった。

1924 年 1 月初頭，Карахан は私と Терешатов に上海に出立する様に，と知らせてきた。そこで，ソビエト領事館員 С. Л. Вильде が私達を迎え，さらに広州の Бородин の配下へ送ってくれることになっていた。

上海の駅のプラットホームで，私達に近づいて来たのは余り背の高くない，がっしりした男だった。

―私が Вильде です。―と，言った。

―どうしてあなたは私達だとわかったのですか―と，Николай が驚いて尋ねた。

―髭を剃っていないから―と，一寸笑って Вильде が答えた。

―本当だ―と，どぎまぎして顎を撫でながら Николай は言った。

広州行きの汽船が出るまでの間，私達は上海を見物した。落ちぶれた白系ロシア人に出会った。士官達は古びて折れた肩章のついたくたびれた詰め襟の軍服を着ていた。夜，Вильде は私達に上海の最高のダンスホールの一つを案内すると約束した。私達は 2 階のボックス席に坐った。ここからは客のダンスの合間にロシアの亡命者達が自分の《芸術》を披露するのがよく見えた。彼等は生活のために芸能人に《変身》したのであった。踊り，愛の歌を歌い，オーケストラを演奏した。

―ダンスホール，バー，それに娼家も白系ロシア人でいっぱいです―。と，Вильде は言った。そこにあるのは絶望的な貧困である。ほとんど全ての亡命者達は自分の罪を告白した後，帰れるものなら喜んで祖国へ帰った

であろう。しかし，彼等のあがりで生活している白衛軍の上層部の指導者達に制裁を加えられるのを恐れていた。上層部の指導者達の中に，かつての極東《統治者》Меркулов が居た。彼は最盛期には《我が者顔》に沿海州を盛んに荒らしまわっていた。かくて若干の富裕な亡命者達は当地の企業に投資し，またある者は小さな店や下級飲食店を開いた。第3の人々は略奪した品物を売り喰いしていた。上層部の連中に馬鹿にされているその他の貧困に陥っている何千もの亡命者達の苦難は彼らにとっては少しも問題にならなかった。‥‥まさしく噂をすれば影で，Меркулов 自身が現われた。Вильде はグレーの背広を着た太った男を彼だと教えてくれた。

ボックス席に入ると，Меркулов は私達に背を向けて席に着いた。彼は自分の太った猪首を曲げて階下を見た。そこでは最近，彼の臣下になった連中がパンと水をたとえ少しでも手に入れようと，《稼ぎのために踊っていた。》

私達は上海から広州へ，英国の汽船で出発した。広州に近づいた時，船長がラジオで受信した重要な知らせを私達に伝えた。レーニンが死去したのであった。私達はその時，休憩室に居た。そこには高級船員と若干のヨーロッパ系の船客が集まっていた。

その報道は私達の心を揺り動かした。私達は立上った。私達を見て他の人々も立上った。涙が頬を伝わって流れた。底知れぬ深い悲しみが胸を締めつけた。《レーニンが亡くなった》

私と Николай は甲板の手摺に寄りかかって長い間言葉もなく，鉛色の水面を眺めていた。祖国から遠く離れても，レーニン主義者のソビエト市民にふさわしく働く，という誓いを私達は心の中に立てていた。

広州にて

広州は当時，中国の革命のセンターであった。ここには緊張した政治的活動が存在していた。この国の革命的勢力は孫文のまわりに集まっていた。彼は40年間，絶えず民族革命闘争を指導し，何度も重大な敗北を喫したにも拘らず，人民の解放の新しい道を苦労しながら探していた。

レーニンは孫文の倦むことのない革命運動を高く評価し，彼を高潔さとヒロイズムに富んだ革命的デモクラートと呼んでいた。

孫文の名はソビエト国民にはよく知られていた。私はたまたまこの偉大な中国の革命的デモクラートと会うことができた。そして彼の印象は一生消えることなく残っている。

自己のあらゆる革命的行為の経験に基き，また彼が《人類の偉大な希望》と性格づけた偉大な10月社会主義革命の影響のもとに，孫文は次のような結論に達した。中国の革命家達は労働者農民大衆と結びつくことなしには成功をおさめることができない。

孫文は以前，彼が打ち立てた革命の綱領《三民主義》に新しい内容を盛り込んだ。彼は次のように説明している。民族の原則とは帝国主義の侵略と断固闘うことであり，民権とは民主主義的システムの確立であり，民生とは土地に対する権利の平均化及び資本の制限であると理解すべきである。この新しい三民主義を実践するために，孫文は3つの政治的方針を作り上げた。それはソビエトロシアとの同盟，中国共産党との同盟，農民及び労働者の支持であった。

これらの3つの方針は孫文の政治路線に於いて，はずすことのできない鎖の環を作っていた。それぞれが他の存在を当然なものとして必要としていることは疑いもなかった。もしソ連との政治的，実務的関係を強化することができず，また中国共産党や大衆運動を発展させることを許さないならば，三民主義は十分には実現できない，と孫文は考えていた。この3つの方針は孫文の全ての政治的世界観の最も本質的，有機的，不可欠の要素であり，それは中国の自由を求める闘争の巨大な経験に基いていた。

孫文の死後，彼の同盟者の中の誰が彼の思想，つまり孫文主義の政治的概念の忠実な後継者であり，誰が出世等のことを考えて同盟者の振りをしているにすぎないか，が間もなく明らかになった。

エンゲルスが言っている。《人生の栄光— これは献身的な行為である》孫文博士はそのような行為を死去の1年前に国民党大会において成し遂げた。当時，彼は極めて困難な状況下，国民党右派の反対と闘い，自己の新しい革命綱領を断固貫き通し，勝利者として登場することができた。

1923年の終り，孫文は国民党の臨時中央執行委員会を創設した。そのメンバーは10人で，その中には廖仲愷，譚平山等が入っていた。国民党の再組織に対する準備段階が始まり，ソビエトロシアとの相互接近への新しいステップがとられ始めた。しかし，国民党右派は孫文の新しい革命政策に異を唱えていた。右派国民党員は《西欧の議会主義》の思想の域を越えなかった。彼等は国民党の組織強化，党内部の革命的規律の定着を特に恐れていた。複雑かつ不安定な状況下で，孫文と廖仲愷は彼等と

激烈な戦いを行わざるを得なかった。

当時，この国にはいくつかの省を支配する大軍閥，例えば呉佩孚将軍を首領とする英米寄りの直隷派，日本の手先である段祺瑞を首領とする安徽派，張作霖の奉天派，それらと並んでもっと小規模の軍閥《狗魚》（文字通りの意は犬一魚）が活動していた。通常彼等の権力は一つの省内だけに及んでいた。また時にはいくつかの郡の場合もあった。彼等は皆，お互いに絶えず戦いを繰り返していた。その目的は自分の支配地の拡大であったが，それは政治的影響力を及ぼすためではなく，むしろ収入の源泉を拡大するためであった。

広東省には省都広州を含めて，10以上の勢力の異る小軍閥が互いに反目しあっていた。彼等は時々，北方の軍閥達と戦うために同盟することもあった。1922年，北方軍閥に従うことを望まなかった陳炯明将軍は自分の目的のために《共和国の防衛》というスローガンや孫文の名前を利用し，福建省の南から攻撃に転じて広東省に侵入し，広州を占領。南方中国の政府樹立のために孫文を招待した。

孫文は当時，まだ次のような誤った考えを持っていた。彼は人民大衆を積極的な闘争に引き入れないで，革命の利益のために個々の軍閥の軍隊を利用することができる，と考えていた。1922年4月，広州で孫文は共和国大統領に選ばれた。だが，現実には全ての権力は内務大臣，省の督軍及び司令長官のポストを握っている陳炯明に集中していた。

直隷派がこの国の権力の座に登った後，英米人達は一呉佩孚，陳炯明の主人であるが一自分達の手下に話し合いをする様命じた。

かくて陳炯明はもはや孫文は必要でない，と心に決めた。確かに孫文は彼の主人である帝国主義者達には都合が悪かった。1922年6月，陳炯明は軍事クーデターを行った。孫文は自分の支持者と共に上海に逃れざるを得なかった。しかし，1923年2月，南方の小軍閥のグループの一つが陳炯明を広州から追い出した後，孫文は再びそこに戻り，革命政府を樹立した。

だが，広州を占拠した南方の小軍閥のグループの中にもまた統一はなかった。その指導者達の間には，常に衝突が起こり，相互不信がうかがわれた。孫文という人気のある名前は人々を騙して広東に留ろうとする小軍閥達にとっては必要なものであった。

孫文は真の権力は持っていなかたが，地方小軍閥の間の矛盾を巧みに利用し，革命的大衆，進歩的な知識層と民族ブルジョアジーを絶えず自分のまわりに引き寄せていた。

孫文の政府の支配下にあったのはただ広東省の中心部，つまり北から南へ延びる廊下にすぎなかった。

北，すなわち湖南および広西省から，広州政府に脅威を与えていたのは呉佩孚の軍隊であった。南の香港（英国植民地）は巨大なたこの様に，自分の足を広東省に延ばし，そこから不可欠な命の水を引き出していた。

広東の東部，シーロン，ペイチョウ，ホーユアンの線まで占領していたのは陳炯明の軍隊であった。

広西の北部では省長陸栄廷と将軍シュンホンユン一孫文の正式の同盟者一との間に戦いが行われた。

南寧市を含む広西の南部は名目上，孫文に従っている何人かの地方軍閥の軍隊が占拠していた。彼等は大した苦労もなくこの地域を領有していた。というのは李宗仁将軍（陸栄廷の同盟者）は彼等の侵入に抵抗しなければならないはずだったが，決定的な瞬間に思いがけずも自己の中立を宣言した。広西省の状況は広州政府にとって危険な様相は呈していなかった。

広東の南西部，ロディン一恩平一海南島を含めてロータンの線まで，陳炯明に従っている軍隊が占拠していた。

孫文の政府が支配している地域や広州市においてポストを占めていたのは色々な地方小軍閥であり，自分達を《同盟軍》と名付け，政府の命令を実行していた。彼等の中で最強で，戦闘力があり，いずれよりも武装の勝れているのは楊希閔将軍指揮の雲南軍であった。それは3軍団から成っていた。

第1軍団（兵員5,500，第1・第2歩兵師団）は広州に配置されていた。第2軍団（兵員8,000，第3・第4歩兵師団）はその一部が広州に，一部が広州一九龍鉄道の沿線に配置されていた。陸上軍の他に，第2軍団長ファンシーシェン将軍は河川用5隻と航海用2隻の船を持っていた。

フゥイェンシュン将軍指揮下の第3軍団（兵員5,000，第5・第6歩兵師団）は増城及び広州一三水鉄道地域を占拠していた。楊希閔将軍の軍隊は総計23,000の兵員であった。

この軍隊の雇われ兵は雲南出身で，故郷から無理矢理，連れて来られたのであった。現地の人々との関係は悪く，その人達は彼等を他国者の略奪者としてひどく嫌っていた。また厳罰主義の規則と，ほんのわずかの不服従に対しても銃殺を行うことで，何とか雲南軍の《統一》を維持していた。将校も兵士も何の為に戦っているのか解らなかった。軍の主人公達一雲南の将軍達一は彼等に

給料を支払い，衣服を着せ，食料を給した。一方彼等の方は目的も，理由についても思い迷うことなく，行けと言われる所へはどこへでもあとについて行った。

何人かの最高人物，例えば楊希閔（東方戦線司令）等の人が国民党に入党したのは勿論，思想的な面からではなく，実際的考慮からであることは明らかであった。

最もうまく団結していると思われていた雲南軍もまた，内部の矛盾のために分裂していた。最高司令官楊希閔（彼自身第1軍団長）と第2軍団長ファンシシェンとの間に激烈な勢力争いがあった。この場合，ファンシシェンの方が明かに強力であった。というのは彼の軍団の方がより団結し，規律が保たれていたからである。

ファンシシェンは軍団が占拠した地域の徴税権を行使していたので，師団長達も金銭的には彼に頼っていた。楊希閔の軍団では師団長達は勝手に地方住民から税を集め，単に名目上，軍団長に従っていたにすぎなかった。特に第2師団は時には彼の命令を全く聞かなかった。楊希閔将軍は背の曲った，いつも陰気な顔をし，垂れさがった口髭をはやし，ひどい二日酔いからまだ覚めていない人の様であった。彼は陰謀の渦巻く複雑な状況の中をうまくすり抜けていく手腕によって，軍隊内の自分の勢力を保持していた。

彼と正反対だったのはファンシシェン将軍であった。彼は肉体的には健全で，上背のある真黒な口髭をはやした美丈夫であった。過度の自己過信によって彼は滅び去った。これについては後で述べる予定である。

雲南軍の指揮官内部に，いかに矛盾があったにせよ，他の小軍閥，特に広州の将軍達の率いる敵対的な軍隊の面前で内訌をおおっぴらに始めないぐらいの理性は持っていた。

広州の小軍閥達は《よそ者》—強力な雲南軍—が広州に於ける収入源を握っていることに我慢ができなかった。それは鉄道，賭場及び娼家，酒，煙草の売上げ税であった。

広州軍はその員数も軍事力も二流であった。孫文自身は広州軍が広州政府を支持し，遅かれ早かれ，南方グループの中で指導的な地位を占めると予想していた。だが，実際はこの軍の主人公達の関心事は自分の個人的な利害だけであった。

広州軍の首領は許崇智将軍であり，彼は南西戦線の司令官であった。許崇智は国民党の中央執行委員会のメンバーとなり，その中で中道派の立場をとっていた。物腰も極めて丁重な，この美男の若い将軍はごく最近まで，嵐のような乱痴気騒ぎに明け暮れていた広州の《黄金の若者達》の一員であった。その後，彼は落着きが出て，教条主義と全くかけ離れた革命の文章の《名人》となった。

広州軍の3つの軍団のうち第3軍団だけが（その全てが彼の部隊というわけではない）実際には許崇智に従っていた。第1軍団長リャオフンカイは完全に独立していた。従って軍の司令官とは緊張した関係にあった。彼の軍団は広州の南西地区を占拠し，その編成は第12，13，19独立旅団であり，兵員約4700名で軍団の戦闘能力は大きなものではなかった。

広州軍の第3軍団長李福林は国民党の市委員会委員候補であった。この初老の男は広東の出身で，辛亥革命以前，大きな海賊の一団を統率していた。孫文は彼を革命の進行の過程で，自己の陣営に引き入れた。孫文の政府が存続している間は，李福林は彼を積極的に支持しなかったとしても，彼に反対することは一度もなかった。李福林の軍団は兵員約4,000名であった。軍団の主力は海南島に集まっていたが，残りは珠江沿いの南の地域に展開していた。

孫文はこの軍団に頼って多数の小匪賊と戦って来た。実際はこの《兵団》は地方の匪賊達と気脈を通じ，彼等を支配し，略奪品の中から一定のパーセンテージを受けとっていた。

李福林将軍は省政府の中で，何度もいくつかの高い地位を占めたが，長期間それに留まることはなかった。何故なら，大抵の場合それは儲かるものではなかったからである。

李福林の軍隊を知るにつれて，それは軍隊として戦闘力がまるでないことが明らかになった。軍団指揮の実際的諸問題は自分の兄弟に委ね，将軍自身は商業や政治上の活動により熱心であった。

第2軍団は第1，2及び3師団，第7，8，11及び14独立旅団，独立4個連隊の編成であった。独立旅団（第7旅団を除く）及び独立連隊は戦闘方面ではその威力が発揮できず，専ら住民から徴税するのに役立っていた。

第1歩兵師団は2個旅団から成っていた。この師団は広州軍の中で最良のものの一つと考えられていた。それはウチョウ地区に配置され，兵員3,200名であった。

師団長李済深は広西の出身で，国民党の中央執行委員の有名な一員であった。背はあまり高くなく，がっしりした，出目の彼はとても人付合のよい男であった。李済深は自分が政界に於いて主要な役割を果す使命を持っていると確信していた。

李済深は私達がいる間に，確実に向上していった。彼

は注意深く顧問達の提案に耳を傾け，すぐにそれを実行に移し，自分の指揮下にある部隊の中に，進んで政治工作を組織した。その結果，彼の軍隊は急速に戦闘力を増強していった。

李済深の運命がその後どうなったかについて，二，三語ろう。

1927年，李は当時，広東省長であり，革命に対して極めて大きな罪を犯した。蔣介石の反革命クーデターの後，彼が組織した南京政府の権力を承認し，李は広州コンミューンの弾圧に加わった。1931年からは蔣介石の政権に対して反対の傾向を示し始め，1933年から蔣の派閥に抗して活発に闘ったため，国民党より除名された。1937年の終り，日本の侵略者に対する戦いが始まり国内に統一抗日戦線が生まれた時，蔣介石と李済深の間に和解ができ上った。蔣介石は李を南西中国の統帥部に任命した。そして彼を国民党に復帰させた。

武漢陥落の後，1938年の終りに蔣介石は桂林にやって来た。蔣介石がやって来たのを潮に地方当局は宴会を設けた。私もたまたまそれに出席することになった。彼の席は李済深と並んでいた。私はこれらの《不本意な同盟者》のふるまいを見守っていた。食事の間中，お互いをちらっとも見なかった。李は食べ物に軽く触れることさえせず，不機嫌に坐っていた。恐らく彼は毒物を心配していたのであろう。

ひからびて，骨と皮ばかりの蔣介石は周囲に坐っている人の頭越しに，陰気にどこかを眺めていた。彼は仕掛けられた罠に落ち，命運の尽きた疲れ果てた野獣のように見えた。食事の終り頃，蔣介石は李済深を横目で見，歯をむき出した犬のような笑いを浮べ，投げ出すように言った。―明日，会おう。―

明らかに蔣介石側の男である通訳を前にして，彼は国民党軍の規律のあり方を批評し，北伐当時の国民革命軍のことを温かく思い出した。翌日，李は蔣介石と面会しゲリラ運動の指導責任者に任命された。

李済深と私が最後に会ったのは1956年11月であった。私は当時，ソビエト使節団の一員として孫文生誕90周年記念を祝うために北京と南京にしばらく滞在していた。李はその時までに国民党革命委員会議長及び中華人民共和国中央人民政府の副議長になっていた。私は1959年10月9日に李済深が北京で死去したのを新聞で知った。

さて，また1924年に戻ろう。広州軍第2軍団第2師団は広州から北東3キロの地点に配置されていた。その師団は3個連隊で兵員総数2,160であった。その司令官はチャンミントォで，彼は国民党員で軍事的教養は持っていなかった。彼にとって，師団は戦闘行為のためよりもむしろ，何らかの商業的操作のために必要であった。チャンミントォ将軍の人物そのものもかなり興味のあるもので，彼と私とは第一次東方出撃の時期にまた出会うことになる。

第2師団の師団長の指揮下に2隻の小さな航海用の船があり，彼は自分の商業上の必要のためにそれを利用していた。

第3歩兵師団は兵員3,000で，その中には2個旅団（4個連隊）あり，それは省の南西及び西部に陣取っていた。師団を指揮していたのはシーチャンティン将軍であった。

第7旅団及びそれに付随する第16独立歩兵連隊はいずれもシュイチ将軍の指揮下にあり（許崇智将軍の兄弟）兵員2,000に達し，シータンの鉄道駅の地区に配置されていた。見たところ，その旅団の兵隊達は引き締められ猛訓練を受けているようであった。シュイチ将軍自身は全くぱっとしない，優柔不断な人物であった。

ウトチェン将軍の指揮下にある独立公安旅団は2個連隊ともモーゼル大隊から成っていた。その兵員1,300で，さらに騎兵中隊も存在していた。

広州生まれのウトチェンはかつて市の警察長官のポストにあった。法律家としての教養はあったが，特別の軍事訓練は受けていなかった。しかし，軍事問題にかなり通じており，自分の部下の中の軍事専門家を利用した。ウトチエンは極めて高い教養，並みはずれた知性，狡猾さの点で，他の将軍の中で際立っていた。それ故，これら軍人仲間のうちで重要視されていた。政治的信念に関して，彼はどちらかというと国民党右派に属していた。しかし，ある時期まで巧妙にこれを隠し，左派と思われていた。私が最後にたまたまウトチエンに出会ったのは抗日戦争の時であった。それは1938年～39年の冬，広東省の北，韶関市に於いてであった。ここに南方戦線の司令部が置かれ，私は長沙からここへ到着したのであった。ウトチエンは当時，広東省長であった。彼は南方戦線を指揮している張発奎将軍と一緒に私達を駅まで出迎え，町のはずれにある立派な一軒家へ連れて行った。ウトチエンは英国風の服装をしており，昔と同じロシアの貴族のように思えた。日中戦争や中国人の身にふりかかってきた大きな災難が特に，彼の気持を動かすものでないことは明らかであった。

私達は古い知人という間柄で彼と会った。しかし，今回は明らかに，以前のような敬意を顧問達に彼は感じて

いなかった。自分の立身出世は軍事作戦の成功に由るものでないことを知っていた。彼の野心は現在持っている自分の地位に十分満足するものであった。それ以上の高い地位を期待していなかった。しかし一方，銀行には彼の当座勘定で，省の《経済活動》によって蓄えられた資金が十分あった。

私達は昔のことを話した。私は虐殺された廖仲愷のことを思い出した。その時はまだ，ウトチエンがこの殺害事件の組織者の一人であることを私は知らなかった。

一全くあの人は惜しいことをした一と，ウトチエンはどこか他を見ながら言い，話題を他に転じた。当時，私は張発奎将軍にも出会った。彼のことはウトチエンと同じように，1925—27年の革命に関連してよく覚えていた。彼は最初，李済深軍団の師団長であった。その後，北伐の時有名な第4軍司令官になった。当時，彼は誠実に革命に奉仕し，立派な将軍と思われていた。1927年，張発奎将軍の指揮の下に最高の軍団，いわゆる鉄軍が出現した。しかし，彼は決定的な瞬間に反逆者蔣介石に反抗するかわりにどっちつかずの立場をとり，広州コンミューンの弾圧に加わり，自分に恥辱の汚名を着せた。

革命が勝利し中華人民共和国が成立した後，彼は人民の側へは移って行かなかった。この点で，北伐時代の国民革命軍の他の多くの将軍達とは異っていた。確かに彼は蔣介石の所へ行って仕えることはしなかった。香港で《小さな所帯》を持って生活を始めた。

このように寄せ集めの広州軍は2,800の兵を持ち，ライフル銃で武装し，さらに2丁の機関銃と4台の使用可能な大砲を持っていた。

広州軍の次に重要なのは湖南軍であった。その兵員は14,000に達していた。私達が到着する少し前に湖南軍は呉佩孚将軍に対する軍事行動で大損害を蒙ったが，それにも拘らず，この軍隊は戦闘関係も組織関係も完全に無傷で残った。この軍の首領は譚延闓将軍であった。

彼の最も親しい協力者で，軍事行動の直接指導者は国民党中央執行委員程潜将軍であった。当時，程潜は孫文政府の軍事大臣の地位を占めていた。彼は国民党の左派に属していた。

兵員に於いても，組織に於いても最も弱かったのは劉震寰将軍指導下の広西軍であった。この軍隊の内部は全く滅茶苦茶であった。その中は将校よりも将軍が多く，兵隊よりも将校が多く，弾薬包よりもライフル銃が多いと言われていた。この逸話は真実からそれ程かけ離れたものではなかった。この軍隊の兵員は5,000～6,000で7つの歩兵師団から編成され，そのうち第1，2，3師団は東方戦線，つまり，石竜の北の地域に配置されていた。一方，残りの師団はフーミン諸島の要塞地域に配置されていた。劉震寰将軍は背が低く，風采があがらず，大きな騎兵用の革長靴を履き，まるでおとぎ話に出てくる猫のような人物で，当時，いかなる政治的軍事的役割も果していなかった。彼の軍隊は全く雲南軍の付属物にすぎなかった。

小軍閥以外に朱培徳将軍の小さな軍団が存在していた。

政府の指揮下にある空軍は全部で飛行機4機と水上機2機を持っていた。1916年製の飛行機はぼろぼろで，それに用いる予備部品はなかった。空軍を指揮していたのは孫文の個人秘書であった。恐らくこれが政府に対して完全に忠誠心のある唯一の部隊であったであろう。航海用の軍艦に関しては修理を必要とする巡洋艦，砲艦，2隻の輸送船があった。砲艦と輸送船はオウヤンリン将軍に任されていた。彼は海のことはおろか，それ以外のことにも何の知識もなかった。オウヤンリンは名目上，孫文に従っていたが，実際は誰にも従わず，押収した阿片を船に積み込んで運び商売をしていた。河川用としては22隻あり，その中には8隻の砲艦があった。どの砲艦も頼りにならない装甲で貧弱に蔽われ，近距離からは小銃の弾丸でさえも貫通する程であった。砲兵隊は極めて劣悪な射撃場しか持たず，砲兵の訓練はひどいものであった。1924年の初頭，広州政府の支配下にある地域の武装勢力の状態はこのようなものであった。

地方小軍閥は自分達を《同盟軍》と呼んでいたが，彼等は自分の稼ぎ場を北方軍閥や陳炯明将軍の侵害の企てから守るために，事実ある程度は団結していた。それ故，彼等は言葉の上では楊希閔将軍を自分達の最高司令官と認めていた。本質的には私達がすでに見た様に，彼等は分裂しており，各々はただ個人の利益のことだけを気にかけていた。彼等は1911年の革命の後の，全ての封建軍閥と同様に何よりも自分の軍隊を大切にしていた。彼等の存在の法則は簡単であった。《軍隊が存在すれば権力が存在する》この法則に従って小軍閥達は広州の自分達を同一方向の汽車を駅で待っている旅行者と感じていた。彼等の各々は広州にいる競争者を踏みつぶすか，《自分の省》を戦って取り戻すのに充分な力を蓄えようと努めていた。彼等は一般に自分達が占領した地域の経済的発展や住民の生活の改善について全く気にかけなかった。小軍閥達が何よりも関心を持ったのは収入の維持であり，それは彼等の間に次の様な規模で毎月割り当てられる税収であった。

雲南軍‥‥319万ドル
広州軍‥‥106万ドル
広西軍‥‥ 10万ドル
海　軍‥‥ 37万ドル
他の軍隊‥‥100万ドル

小軍閥達はお互いに疑い，隠し合い，少しも信用していなかった。ここでロシア通信社の記者が1924年12月，ファンシーシェン将軍とインタビューした時のユニークな記事を引用しよう。

「本日4時，記者は第二雲南軍司令官ファンシーシェン将軍と会見した。このインタビューは将軍と会おうとする，長期にわたるねばり強い努力の末実現された。インタビューは警察長官ウトチエン将軍の斡旋でやっと成功した。3時45分，記者は司令部に出かけた。それは崩壊しないように何とか梁で支えられた，半ば壊れかけた家の中にあった。種々の色の旗と電球でできた4つの環がそれにある種の華やかさを加えており，その環は司令部の建物から通りを越えて向こう側に続いていた。この飾りつけは1911年，雲南省の最初の革命蜂起の記念日を祝った後，そのままにされたものであった。司令部の入口には二人の衛兵が守っていた。彼等は急いで記者に近づき，通行許可証を求めた。当直副官が助けに来て，記者を応接室へ連れて行った。もっと正確に言うと，これは応接室などではなく，崩れた家の中の，少し片付けられた小ななコーナーにすぎなかった。そこには寝台二つ，二つのインクつぼが置かれたテーブル，対の椅子，編み細工のもう一つの丸いテーブルがあり，そのテーブルには茶飲みカップが置かれていた。これを見ると，ここは明らかに居室であった。壁は崩れ，ねずみが人間の存在などまるで意に介さず，床をかけ廻っていた。密な蜘蛛の巣は椅子まで垂れ下がり，訪問者の頭にべとつきそうになっており，ファンシーシェン将軍の司令部の応接室の全体的な印象の仕上げとなっていた。

記者は一連の質問のアンケートに記入するように求められた。姓名，住所，訪問目的等々。それからすぐに当直副官は訪問者を取り次いだ。

《司令部にはファンシーシェン将軍はいるのですか》との質問に対する答えを得ることはできなかった。当直副官は将軍の気持を察して，彼が司令部にいるかいないかをはっきり言う勇気を出す気がなかった。10分後に私達は知らされた。《ファンシーシェン将軍は不在です。参謀長があなたにお会いします》騙せやしないぞ。ファンシーシェン自身ではなくて参謀長だって。我慢せざるを得ない。長い階段をいくつか通り，何か書記局のような大きな部屋に行き当った。二人の書記がせっせと漢字を丹念に書いていた。ある一人の将校が愛想よく質問した。《あなたはどういう人ですか。どこから来たのですか。その目的は》当惑してあたりを見廻した。どこもかしこもごみだらけで，一時的に住居に使われて崩れかけた家の様子が目に入った。明らかにボスはここに長く滞るつもりがないことを物語っていた。私の協力者が前にした机は多分，がらくたの入っている倉庫から引き出してきたものであろう。二つの金を入れる引き出しはなくなっており，恐らくそれは鍋を温めるのに使われ，他の二つは壊されて板状になり，自分の運命を待っていた。机の上板は間違いなく，何かやったなという感じを起こさせた。それは今にもはずれて落ちそうだった。

突然，廊下に足音が聞こえた。何人かの武装兵を引き連れて入ってきたのは文官の着る中山服を着た，上背のある中国人であった。彼は私の協力者と並んで坐り，愛想よく挨拶した。ファンなのだろうか。それともファンでないのだろうか。彼は自分の方からそのことを知らせようとはしなかったが，その後に続く話からようやく，この人がファンシーシェン将軍自身であることがうまい具合いに解った。

モスクワの記者のこの記事は私達がこの国の南方地域へやって来た時にぶつからざるを得なかった状況を大体において正確に伝えている。